

ZOCALO 2020 6 ▶ 7

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

美術館は休眠しない

新型コロナウイルスの脅威は美術館の活動にも深刻な影響を及ぼさずにはおきません。日頃から当館に足を運んでいただいている方々には誠に申し訳ありませんが、本稿を執筆している5月3日現在、感染防止の対策として私たちもまた休館を余儀なくされております（本紙が皆様のお手元に届く頃には再開館しているかもしれませんが、最新の状況は当館ホームページをご確認ください）。また、埼玉県のみならず、全国各地の美術館の多くも展覧会の中止や延期に追い込まれ、講座などのイベントもできない状況におかれています。

必要不可欠な場合以外の外出を自粛するというのが今、皆が守るべきルールであるからには致し方ないことですが、それでも美術館自体を休眠させるわけには行かず、オンラインでの発信など、可能な範囲での活動に取り組んでいます。本来ならば「New Photographic Objects 写真と映像の物質性」と題した展覧会を開催中のはずで、すでに展示も完了していますが、残念ながら開幕は状況が改善するまで順延せざるを得ませんが、出品作家の皆さんのご協力を得て、会場の記録などの充実した内容の映像を制作し、当館のホームページで公開する予定です（詳しくは裏面の記事をご覧ください）。

考えようによっては現在のよう非常時は、美術館におけるネットの活用を推し進める機会といえるかもしれません。そこから新たなミュージアム・リテラシーが形成されることを願っているのですが、しかし、美術館が美術館である限り、ギャラリーでのリアルな展覧会が唯一無二のレゾナントルであることに変わりはないでしょう。ネットはいかに有効であっても、美術館にとっては補完的な情報提供の手段なのです。

演劇やダンスでもそうでしょうが、展覧会もまた観客の目に触れることではじめて成立します。今回の事態ではその自明の理ともいうべき現実を改めて思い知らされることにもなりました。当館ではこの春に「森田恒友展」を開催しましたが、御多分に洩れず会期中で休館になってしまいました（ちなみに、

自慢話をさせていただければ、「森田恒友展」は美術館連絡協議会の優秀カタログ賞を受賞しました。その後、一部を展示替えする時期が来て、予定通り作品を入れ替えたのですが、作品の借用条件であったとはいえ、観客不在が分かっているの展示替えとは、まるで不条理小説のシーンでもあるような、むなしくもまた不可思議な作業であったと言わざるを得なかったのです。それでもまだこの展覧会は公開の実績を残せたからよいものの、各地の美術館には一度も人目に触れないまま会期末を迎えてしまった展覧会が多々あるはずで、スポーツなら無観客試合は試合として成立するが、未公開に終わった展覧会は果たして展覧会と言っているのだろうか、いささか複雑な思いに陥ってしまうのです。

いや美術館閉館以来のこうした危機にあってこそ、私たちに芸術の力で困難な事態に直面している人々の心を癒し、また勇気づけること、コミュニティの核となることが期待されているのではないかと。美術館人なら誰もがそう考えているのですが、肝心の展覧会の開催が難しいのでは、その使命を果たすこともままなりません。しかし、いかに制約が多いとはいえ、なお可能なこと、いやむしろ積極的に取り組まなければならないことがあるはずで。印刷物やオンラインによる発信によって再開の日が待ち遠しいという気持ちになっていただければうれしい話ですし、デジタルメディアの可能性への試行錯誤的な挑戦を続けるつもりでもあります。美術館は決して休眠しているわけではなく、できる限り美術の情報に触れていただくための努力をして本来の活動に復帰する日に備えていること、また、医療の現場の第一線で献身的な働きをしている方々に私たちも皆さまと共に深く感謝していることをお伝えしておきたいのです。最後になりますが、皆さまくれぐれも健康の維持にご留意くださるようお願い申し上げます。

2020年5月3日 埼玉県立近代美術館長 建島 哲



企画展「New Photographic Objects 写真と映像の物質性」のエントランス



「MOMAS コレクション 第1期」/「特集：斎藤与里」の展示風景

企画展「New Photographic Objects 写真と映像の物質性」及び「MOMAS コレクション 第1期」の展示設営は完了しています。新型コロナウイルス感染症が1日も早く収束し、再開館できる日を待っています。

MOMAS コレクション・アップデート 2019+ 新たな収蔵品とともに

2019年度、新たに MOMAS コレクションに加わった 26 点の寄贈品は、近現代の美術史に足跡をとどめる 7 名の作家（森田恒友／倉田白羊／田中保／末松正樹／瑛九／大野百樹／清水晃）の作品・資料です。その多くが埼玉ゆかりの作家として、これまで重点的に作品の収集を続けてきましたが、今回の寄贈でコレクションの充実度がさらにパワーアップしました。そのラインナップの一部をご紹介します。

洋画・日本画を自由な感性で行き来した画家・森田恒友。今回収蔵となった作品 10 点には、希少な素描類や扇面の作品、色紙が含まれています。中でも《水郷図(春)》と《水郷図(冬)》は、繊細な線と淡い色彩で平野の自然とそこに生きる人々の暮らしが描かれた、晩年の名品です。

また、森田の旧蔵品として、明治後期から昭和初期にかけて活躍した画家・倉田白羊の素描類 5 点もあわせてコレクションに加わりました。森田家に伝わった倉田の作品は、同じ 1881 年に埼玉県で生まれ、ともに雑誌『方寸』の編集や春陽会の創立に携わった二人の交流を物語ります。5 点の中には、当館で所蔵する小笠原島の風景を描いた油彩画の下絵とみられるドローイングが含まれています。これらは 2020 年 2 月に当館で開催した「森田恒友展」をきっかけに寄贈されたもので、森田・倉田の画業をたどる上でのヒントと、コレクションにさらなる厚みを与えてくれるものとなりました。



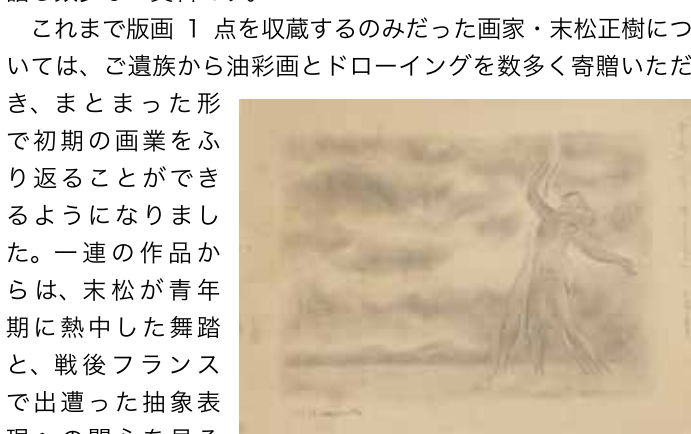
森田恒友《水郷図(冬)》制作年不詳

やはり埼玉ゆかりの作家として過去の展覧会に出品いただいた縁で、田中の油彩画 3 点と瑛九のポスター 1 点が寄贈となりました。柔和な裸婦像のイメージが強い田中ですが、それだけにとどまらない作者の画業を伝える人物・動物像、静物画が新たに収蔵されました。モデルやモチーフに投げかける、田中の優しいまなざしが感じられます。そして多彩な表現の開拓に挑んだことで知られる瑛九、その晩年の代表作《田園》(当館寄託作品)を紹介したのが、1975 年の瑛九「田園」展です。この展示は、光の条件を変化できる環境で作品を見せるという画期的なもので、その時のポスターは当時の様子を物語る数少ない資料です。



田中保《花瓶のある横顔》1926年頃

これまで版画 1 点を収蔵するのみだった画家・末松正樹については、ご遺族から油彩画とドローイングを数多く寄贈いただき、まとまった形で初期の画業をふり返ることができるようになりました。一連の作品からは、末松が青年期に熱中した舞踏と、戦後フランスで出遭った抽象表現への関心を見ることが出来ます。



末松正樹(作品名不詳) 1944年

50 点のドローイングは、第二次大戦中にフランスで捕虜の身となった末松が軟禁生活の中で描き続けたもので、自身の芸術に向き合う末松の真摯な姿勢が克明にあらわれています。

埼玉県秩父市に生まれた大野百樹は、山岳風景を主なテーマに院展で活動した日本画家です。作者の厚意により、これまで当館で収蔵していなかった早期と晩年の院展出品作 2 点加わりました。厳しい自然が織りなす造形美が、情感豊かに描きあげられています。

埼玉県在住の清水晃は、1960 年代に既成概念を打ち破るような「反芸術」の動きに関わり、そののち漆黒のオブジェのシリーズなどを発表してきました。作者寄贈のスケッチブックには、身近な缶詰やコップなどの素描が登場します。これらは途中で内側と外側が反転して S 字に結合されており、空間の操作が試みられています。これまでに収蔵した 20 点あまりの作品を補う形で、清水の制作の背景を理解する助けとなることでしょう。



清水晃《S字型(スケッチブック)》10枚目 1963年~

このように、2019 年度は収蔵品のミッシング・ピースを埋めるような寄贈が続き、当館のコレクションが一層豊かなものとなりました。貴重な作品をお贈りくださいました皆様に、改めてお礼申し上げます。各作品は、今後 MOMAS コレクションの展示などで随時ご紹介していく予定です。(G.R.)